



Title	<紹介>武井和人・木下美佳編『一条兼良自筆 伊勢物語愚見抄 影印・翻刻・研究』
Author(s)	高嶋, 藍
Citation	語文. 2011, 97, p. 72-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69189
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

武井和人・木下美佳編

『一条兼良自筆 伊勢物語愚見抄 影印・翻刻・研究』

高嶋 藍

『伊勢物語』旧注の嚆矢、一条兼良著の『伊勢物語愚見抄』（以下、『愚見抄』とする）の伝本は、長祿四年の奥書を持つ初稿本と、文明の奥書を持つ再稿本の二系統に大別される。なかでも、初稿本系統の伝本は、わずか数点の現存が知られるにすぎなかったが、この度、武井和人氏が購入された武井本が新たに加わった。『思文閣古書資料目録（善本特集 第21輯）』第二二四号に「江戸初期写 初稿本系統」と掲載のあった『愚見抄』を、武井氏がご購入されるまでの経緯は、本書の「あとがき」に詳しい。

この武井本の価値は、稀少な初稿本系統の本文を有していることのみではない。思文閣の目録では「江戸初期写」とされていたものの、実際には「兼良自筆」であると指摘できる点も、随一の価値であろう。本書は、その武井本『愚見抄』全文の影印・翻刻と、武井氏・木下美佳氏による解題から構成される。

武井氏による【解題Ⅰ】では、『思文閣資料目録』の解説の書誌的な補足がなされ、また、筆跡比較のために用いられた兼良自筆資料名が挙げられる。その上で武井氏は「兼良独特の「を」字などでそれと察せられる如く、また、本書に数多く見られる重書き・抹消・傍記等、などから見て、本書は兼良自筆と判断して良

いと考へる」と指摘される。

木下氏による【解題Ⅱ】では、まず、冷泉家時雨亭文庫蔵本『愚見抄』の影印を挙げて筆跡を武井本と比較しつつ、武井本が兼良自筆であることの論証が行われる。また、氏は以前「刈谷市中央図書館蔵『伊勢物語愚見抄』の位置づけ」（『中古文学』八二号・二〇〇八年十二月）において、刈谷本『愚見抄』が初稿本と再稿本の間位置する本文であると論じられたが、その点について改めて示しつつ、武井本も刈谷本と同じく初稿本から再稿本に至る過渡的な本文を持ち、「中間本」とも呼べる性格を有すると述べられる。その上で注釈内容・削除記号・抄出あるいは引用される物語本文の切り方・細字書入などに着目し、初稿本・刈谷本・再稿本と比較して武井本の位置づけを行われる。更に、木下氏は、武井本が兼良自筆だからこそ伝える兼良の考証過程についても検証される。

本書は、長年に亘り兼良研究を続けてこられた武井氏の、「この貴重な典籍を、しかるべき専門家の検討を付した上で、なんとかして廣く學界に提供したい」というご企図により上梓される運びとなった。兼良自筆の影印が全文掲載されることの意味は大きい。翻刻を担当された諸氏、詳細な考究を行われた木下氏、そして何より武井氏の暖かいご配慮に敬意を表したい。

（笠間書院、二〇一一年一月、四一八頁、一五、五〇〇円）

（たかしま・あい 本学大学院博士後期課程）